

一〇六

北越奇談

五

北越奇談卷之五



崑崙橋茂世述

東都柳亭種彦校合

怪談

葛塚の七十年前沼草原地なりしと用後して今屋を
 数百畝田知志が廣闊なり 爰に辻番を帯とつゝの娘
 一人ありのそけい々々家貧々々昼に農むべしとて夜に
 町の番に出で曉まうぐ不帰一日畑に出く草沼深く打
 らへしに忽ち中元ありくゆふはあつどそくそ居し
 ざるなり程深くあつて見れば大サ小田系挑灯のあつる蟻蟻

北越卷之五

ひとりまらびおしりの男漁をりつ々其頭をうらつ
 金銭のど々依り吸居し煙草の吹がをの虫乃蟻
 々々野にやぐせ虫か代縮りく丸くなり又吹か
 々々數十落したれが終に焚死をを灰たみの男けの番
 に出く居し娘一人芽屋に臥し居しに忽ち大乃
 といさしの枕のかたりにけうまりありと母しうごうと女
 々々起より見れば又一物ありと色に眠んとそれ又
 女家の居るとありと即番小屋にむす父は告ぐ
 父らつ々見を悩と女家にむれが又女をく化物きり
 おどろろとと教日終に奇病と幾と依り傍に法華を

読誦くは怪止ぬわやびべく蝶虫とてどお百案乃
め其死乞奴怪とてとて虫

其二

蒲原郡旭村より五泉の方へ越る所山中に三五畝地とて
ありは池の長四尺ふかりなり。蛤蚧ありて夏日晴天静なる
とてふ山に浮び出つ又論休村古阿賀川の五尺ふかり
の蛤蚧あり日中田圃人なきに密に掘の陰にたてとて窺ひ
見るとふ必む浮く出つ其背段黒くく顔の下朱のじ
黒人なるむむ見をたるともふ蝮蛇なりして毒き病ぬ
又去峯村に泥鰌池とてあり日後門嶽の中に泥鰌池と

北越巻之五

つありて其ともあり所むらや去二三尺ふかり一尺ふかりあり
ふ基むより然れども池中泥はくくく人ふれが皆かろくくゆ
にぬゆるとてあふれどとつりマ可惜一把の葱白の和
尾を煮くく以三杯を傾けざるの状

其三

西川管根とつる所町より窪なる池に莖わくく状捨
お十年掃除も用ひざるに一とせ六月淋雨くくおき
暑き夜青白の光ありものそそ色にありつれ這まらけり人
くわつてつ大勢挑灯など照しあつまろくく尾をえんば
去二尺ふかりなり。蛭蚧わりし尾をもろくく按れば西圃大蛭

蚓の奇も真なりとて

蚯蚓の吟とて唐山の書にも入る歌女の鉢あり夏目
淋る時んとてり以庭際津溜さとの不とり土中に吟じ
その声は寥々予あれを按ざるに諸虫の吟とて又口舌
皆羽のりその羽を裁ひて声と出そののり又口舌
ハ勿論なりゆぞ蚯蚓の吟とて羽を裁ひて声と出そののり又口舌
是必蚯蚓の吟を裁ひて声と出そののり又口舌
蝶りと其居る所おめ依る上古正愚の者土中に吟
めは採りゆく以蝶の吟とて羽を裁ひて声と出そののり又口舌
政に於れもをりて是とてなせるなりん或人の曰蚯蚓乃た

北越巻之

蝻の吟とて別音なりとてれど是は妄説なりと明らなり
只蚯蚓の吟とては吟とて頭のさへは用くく水垢を若
とて吟とて

又田螺鳴くとてると能指李節さどはも其の部を出
幾句もあり且農俗よく是を以て早夾雪漬より耘耕乃
以て田間常に其音をすくとてはもを以て用ひされが
そのはめあるとは知れど予は其頭珠を以てありと
とてり其田螺なりとてはすされど公とてりらひ耳を傾
るるに古呂く加良くの音寂寥とかの長安乃鼓吹
にも恥ざるべし 爰一絶を新製す

田間水足事春耕風暖黃苗半寸生弦月

濛朧會兩夕巡時靜聽螭贏鳴

本草田螺螭贏ノ二心とめてぐ螭贏ハ蓋さず只農俗

云田に一ふたつあるものしくつくるとつり依ては野調と賦

ししく以てつり其田家春夜の情状述るとしてこそ予密

に考るに田螺よくは声をなすものつられさ一即田畦に出

て静にひとり其夢に付く揺りおるに田螺螭贏三つ四

つとほ是を泥盤中よりわら度前よりあきしく以て試るよ

終夜竟に不睡翌夜又かの田畦にゑく夢に即声あり予

ねくらねおむれども田螺さ予あきりに杖を以て畦を

北越巻之五

打ば忽土中より白きとたる小蛙一り飛出たり即俗に石

蛙といふものなり是をえく池中に放て夜ならまら声色

く田畦に異さるよちよ一蛭蚓の説おほく以て可一笑

越回の俗説に河鹿土中の鳴くとも三年に一其境

處るとして河鹿其形鮓魚に似く小なるもの一二寸大

なるも四五寸に不るとそそ多廉よ似されば河廉といふなる

べ一是も又前の二説に類しくある小魚の鳴く理なりと

又と予いまも不試は魚常は水上に不浮砂石につま

めそ或は水中土沈に居む積りの尾中針ありて人とさ次

考れば堤の下なり自然にうきく水はうきく空研をがゆ

に以魚あつたり位く其亦てなせり予が御本より火四
常は洪水をさぐの用をさす珠の信川の水流兩岸に付
て數百邑里年々く水を愁るで苦んぶ是を防ぐの費幾
千万ぞやあうりとくとお大河一ふび溢るこまこ千日の昔
卒忽あざとまりとて百尺の堤只一蹶穴より破ちあす
其水流のあひびく呀林木をぬき村屋をかきけり數十里
の予田只泥海とまりく稻梁のよびひつてもさうなり
是がよちれき第一美の食に當べきある故に兩
うち饑年の飢民渡席をわよびるとあさる之國乃
わさり是を乃る人難う愁とかなるもはばんや或人乃云

北越巻之五

今も成禹王のるも成はく水四の下民は災をまぬるべしと
予笑て曰不燃上古の水を移る民は分國の危ごとくわく
河水溢れども今時乃ごとく堤の防ぎもなく其水乃お
ゆく呀屋宇漂へくをわかせども正徳の民是をおぎらるの
術を故に禹王その水脈をたぐり地理のよろきに随て
流をさちびくものなり今の世も是を補ふ乃奇術ある人も
その南によろきも其北によろりあり其西をわびむれば亦
又不従たまく四方のよろきとゆる人ありとも今時の人勝
只己の勝まも成情も其下凡れんと成恥ふべしお衆て
やうとたくと禹王在とちほぞ其術をおぎると成はん予が

四代水袋をまらぬくくそ代は六方に足富饒の地より

其四

漆千杯朱千盃黄金千両朝日映夕日暉有梨樹下
古碑他邦へあつて予が國己の三ヶ所あり其一長岡東
山下金ヶ谷村觀音其二新茂田より南牧山藥師其三村
上関谷桂村なり其里俗をまらぬくくそ代は古碑とつり
むろ長者某黄金木を土中に埋め此碑をまらぬく
其所在を失く尋ねぬるにうはとつり是と刃切
人羨むるにむらぬく予按むるに中右の好むる
人々も此我作をまらぬく衆人のまらぬくを記さしめけん是

北越巻之五

かろくぞ福家の借らるるを所なるべし只三ヶ所の中其一所
の碑をまらぬく實に其余の下愚の人羨むるに
はけり我御にもめりけんといひやじも代めやまらぬく
なぐり予密にけ句を考ふるに漆の里がゆに北と西朱の
赤と南と西と南と西と金ヶ谷の中央と朝日と東
の夕日と西なり梨樹の知訓と西と西と是即東西
南北中央とも一物なりといふ事なりべし謀に可一矢これ
とらぬ是と刃切は黄金の實に得難きものなりはけ三指
怪むるものなりと予が國民間下愚の輩他邦の人と對
し是木の語れり予が我國代漆んともゆく恥づきの

なり只他邦の人を下愚の信とて中智のそとるべく上智の
心裡に笑と罷ん

其五

新深の泥亀を料匠家業とてとて亀六ととるものあり
凡諸江河より買あらしめく是を切りて救百なり亀六

今己の五十丈のつりく乳力正の衰ひたるに及び一夜
忽ち空しく寒き水に入るとぞ戦慄しく声を吐と

わらわど漸くもばららるるのつりをさざりなれば救百の
泥亀夜芝のうへにたるとり頸のりくはのらまりたる

まきくアト叫ぶ女房記のがりゆどとと回亀六目を穿き



龜六泥龜乃
 怪を見て
 憎まふ。



これをもつれば一物もさへそれより夜ぐおひ少く眠んとそれ
へ即泥逸為迎にあらまき
まき
そのつ
うひ
そり
悔て僧となりぬ

其六

池の端にちき石地菘あり村の若者とを是をさくこ一上
て各そのカとさへ終いのやまうく地の落し地菘乃既ま
分を打りりり村の老姥どもあつまうく是を嘆きその
頭の欠くも代合せけくの之堂を建く糸る一年のまうりい
其欠りとのどく付今な成かどうはわとらりけ地菘又
論をいづらちうく若人みうく瘡を病時ハ細繩五尺とりち
く地菘の前はうり繩はくわの地菘とちうり祝くと曰地

能能救之病草敷くハワ瘡と截之瘡サつるも可敷
 物リ瘡不落則ハ繩と不解ト即翌日其瘡カゲモナク落
 たり石の地菴冥のりく人の怨状ゆる瘡の小鬼地菴の供
 物と貪んとく去るいふ
 信川のわとり裏野村社地の中ハ石一ツあり大ヤ尺斗
 ありんあまをくは黒なり小見ホ敷まに其石を以堀
 中の投どれハ翌朝即元の所ハのぐる我ハハも又かくのど
 其堀泥水ゆくゆく中く一人の力にゆく取揚がまき所
 ありともあやむい

其七

茨曾根永安祥寺にいとせ近村より童子一人侍ひ来り
 ちかひお漬えんぞ教へあつるべと和尚ハ頼とあはじが
 その帝の祖母なるものゆく憐とあつる三日に一夜を
 必争ありその安不夜城問へあひより来より夏にふる然るに
 時ととく来り訪ざる十日の月あり和尚とて堂中
 にお見をわやまか帝に敷ましく汝が祖母已に死し
 死せば必汝が方へ冥意の入りしるべきぞわすとおが
 堂上の打寄月に向く涼と居一が二文の紙忽山門の
 もとりの人の徘徊もあが及く石徑と登りあづるに
 言ひきてるものありゆく是れわかの帝が祖母なり

つれも勞れさるるさぬはく、つと 仰れとがり六地菴の前の憎く
 体居ていゑが又そりく、庫裏のかへりあちく来る、忽大尼を忍て
 ちりりいぢく吠く不止、爰に祖母即路成かへく、ちりりふ
 走ゆるさぬきり、和尚尼とりく、曰、祖母は夜中たるくの
 所と来りわがく、大と忍れく、ゆると入り、子く出て夫を
 追おぎと即人々走り出犬と来りむけ、其祖母をたがぬれ
 ども終つひのゆ成ちりく、和尚尼、怪しく翌日童子とお侍ひ
 く、其家そのうちに、父向むかへの祖母病て不ま起、十日のまりなりと
 童子とらりく、大にりり、云、我昨夜夢に汝をたがぬれ
 しが犬の吠るが、おそり、こふ寺へ入り、かひり、中夜覚りりと

あがさるり

其八

鬼本村何某業のち女房並小兒一人を家に残し、東武に
 出く、赤とせ、がさかくに不仕合打つ、家うちに冷ると、あぢぢ
 已に三年を歴れども音信成絶り、けま、自らひらく、圓まの沙
 妻ま子こも今、我を忍かきり、他の家うちに嫁せ、なりんと、終
 裏店うらみのかさる、野成借住居り、其冬、あ、この妻を
 定さだひけるが、あ、夜忽、圓の沙せ、本妻ほんまきたり、く、枕まくらのり、に
 きてり、か、男おとこ夢ゆめき、く、是これを忍れ、へ面おもてまき、く、髪かみを、と、ど、眼まなこ乃
 ひり、暗夜あんやをつ、ぬき、怒おこれる、あり、さぬ、乃のの、毛け、よ、だ、ら、く、文ぶんに

声と出ると不触即かの化おもひ成のづく夫婦が髪をぬぐう
 引のげがアツト声をききられが忽ちわくとなくきりぬ其の
 髪のおくつと痛く終に夫婦とも髪ぬけく己に半を
 減む其妻乞を愁く去彼男も又苦愁のあまう借となりと
 諸回に順礼し冥仏に泣く七年とするに幸回にぬり己が
 むうの家にも密に其やうと成寝ひるれ一人の女衣を洗
 井の邊より家の内を覗けば十才ばかりの童三四人敷
 きのそばかの男おひらく是れ我家を買ひて居る
 けんとおひらく己に近付ようく衣を洗女の後れとら
 法謝とてふかの女の人よりむきとる顔とれ己が本乃



小女乃夢見
蛇と化して
衆人を
驚かす



妻なりあまりの打撃さおれもつらどきとれが女もふらん

さういさのがりとくとれがまなりたに怒さく其れを

同へ其妻なる者十年の愛苦はも不厭負とちり一子を

養育しく文に恨る所もとぞ是又つらなる奇怪ぞや

其九

地流堂何某の娘久しく病しく不記近隣友の娘とちり突乃

とくしめそく之勢お招く料沢とぞ振舞けるにかの娘も

其使とゆくちまりにゆくと欲れども病中なれむとく

父母とれとゆるさどかの娘はとく不止終に眠まりお振舞

の家は女勢の女光若うち交て或は淫ひ或は踊終うよこ味

線よ〜笑ひまめさけの忍家ひと〜つとたり〜二階乃
上より大サ一尺もろろむどなりん黄なる蛇の頭長くさう出
り女博士の聲もフツト叫び立踏のぞんぐゆのかりやと
騷動もふる小其蛇己に去る人をも是のつら〜怪のうえ
とそ夜の鳥の止のりお彼病る振舞朝人の踏く云我
昨夜夢の振舞の家のゆき〜人へあ〜坐安の振舞
音せ〜人竊のさ〜のぞ〜んバ皆の尻が立踏を〜る故
終り〜るま〜のぞ〜り〜おが〜る

其十

機谷村百姓某兄才二人と一杖東武にゆ〜るを〜せ〜る
其十

い〜り農るの〜い〜む〜ら〜の〜必〜細〜の〜ゆ〜る〜と〜同郷の友に
物せりあ〜るの〜者病にす〜く〜つ〜る〜と〜わ〜る〜を〜愈〜る
と〜ゆ〜く〜後〜より〜ゆ〜る〜と〜知〜る〜人〜に〜着〜病〜を〜お〜し〜る〜と〜兄〜あり
者〜は〜同郷の友〜二人〜同〜居〜る〜と〜ゆ〜り〜ける〜が〜己〜に〜我〜家〜の〜老〜ぬ〜と〜さ
日〜れ〜あ〜り〜朝〜より〜赤〜き〜る〜の〜病〜も〜負〜ざる〜が〜一〜丁〜ぶ〜かり〜先〜に〜きて
ゆ〜る〜と〜い〜ふ〜と〜い〜ふ〜と〜い〜ふ〜と〜追〜ひ〜び〜ま〜り〜と〜去〜終〜の〜家〜の〜中〜に
あ〜れ〜は〜あ〜の〜一〜走〜に〜〜内〜へ〜飛〜び〜入〜ぬ〜家〜人〜皆〜憂〜さ〜す〜と〜立〜踏〜の〜
其〜る〜又〜ゆ〜所〜と〜あ〜る〜と〜兄〜も〜又〜る〜ゆ〜る〜と〜内〜へ〜入〜る〜父母悦
く〜あ〜つ〜れ〜と〜同〜即〜告〜る〜に〜病〜あ〜る〜は〜以〜東〜武〜に〜ゆ〜せ〜る〜と〜代〜踏
る〜父母大〜に〜憂〜く〜赤〜る〜の〜怪〜必〜才〜死〜せ〜る〜と〜い〜ふ〜と〜急〜き〜人〜と

東武にふるゝ其安否は同ぢしむの才病愈く其人と
共はゆり暮り又奇なるかゝ 凡世流行の戯作復讐言志
数百編おく死霊の怪なりと云ふの如く又古より幽霊の活ハ
多くあると云ふれども信がききこゝの如く 豈陰鬼陽人
に向く形と頭一能言語もると云ひんや爰に於て予是
と云ふと只目のあつて又申す生靈夢遊の活の如記せり

其十一

神への敬もるのよろく其威力を益とす了實にさも在
んや爰に假設齋とすも豪富の人あり教世の後家勢次
才に衰微く産業正に乱んとも爰に於て假設齋と

北越巻之五

中興せんと成祈るに百日の祈祓己に満まんとして夜爰
と云ふ如くともなりく環終端正の童子一人枕の上のまゝ
かの假設世に告ぐ曰女丹精をぬきんと家も成りけれ祈
と心愛惜もる野なり然りとて祈福有門人の招く野
に云ふにけれ又乞をつんとともなりくは女の家従来耕田百
余石蒼頭奴婢百余人貢納の小民一千余家依然とて
皆食とて然るに近世の風俗上の好野下必乞を乞ふ
の如く衣服器財の華美飲食の珍味異國山海をおして
おる野なりと云ふ其主己に酒食に耽り花鳥のささむ乞



假設氏
 大樹の下に
 中よりて
 神人乃
 物語りを
 交

立出家にゆくととまらに夜いそむ明どはにまうせてい
 ねとれ山路は失し你林にふ入づくともなれたりけるに忽
 然と大樹下に一小社ありて見ゆる假教女とひらくはとまら
 吟詠天のくゆぐりと即小社を拜し大樹のうしろにすて
 懐くたむと息し折ふし忽表のかたに清麗なる豊の音
 くるに糸来るあり假設社竊に是を竊ひてんが白衣
 高射の神人已に小社の前にひくるとより下即ひて曰忌神
 内いありやと爰に又小社の中より松姿窈窕兼服葛巾乃
 神人走出て大樹の南に坐と白衣の神人即樹下の北に坐
 せり葛巾の神問て曰公今ゆくり来れるや白衣の神答て曰

足元夜つ宮内殿勤番におおきく今正に降んとて葛巾の白
の珍事ある白衣の曰假設氏産業の衰とらりて中興
せんて成祈るをアとて世の盛衰神力の及敷きと成
尔いふなり葛巾の曰公ホ何ぞ告るに齊家の術をりて
多むら白衣笑て曰治圃齊家へ上古の聖賢ども皆然
とて況や汝が貧患何の説やわらうけ言成るとや葛巾
然とて答く曰公不アヤ麟豹の瘦と成以馬師是を誇
名士其貧なり成りて吏部郎是を誇るとり我今そ
二三を述ん只齊家の術其時より其所より其凡俗より
く以計を施とべり上古の地は画く民服一琴を奏て固

北裁卷之五

治る蕭何の刑を三章いらば諸葛の刑を六條に増是皆
其世と時と凡俗ともり我今假設氏が爲に是を討ん
に只富を用やべり即是近世の凡俗にればかりと白衣又
大に笑て曰汝今富とてどの其富得べくんば假設氏万石
の田數十の僕一千の小民以富を競しせんや富實に以
汝是をわんかせん葛巾の曰富を安くとて其道を
りてとてせんが強るは豈及んや古人とるとり農は不
工工の不如高と其陶朱公白圭子貢が富其道を得
り其余古今数千の高其道を得る者少なりと一
其るを乃の家勢忽盛に〜恩沢奴僕するにやうぶさ

小民も又貢の責をまぬくこと成れず郡縣已にゆるなるべし
 郡邑ゆるりたる則ち小民其のづう上とせよ爰に於て上下和之
 故に不謂や人富む仁義思ふると白衣又勃然と怒て曰
 汝も其富をいつるの術のふれぞ也一カノコトヲシヤ小社の中の寓
 人の是を祭るとなく祈に疎ゆることなきらんぞや葛
 巾の曰韓信漂母の食を求めしとまら思ひし元帥とある
 にむろ智あるものぞ呂商八年八旬は満て一郡を安が
 愚をかゆることありとんとむ其用る所は及んで天
 下只一智なり是皆用る人なきと其智の施す所は及んで
 ともつなりと神カハ只人の敬もるにゆる吾らつらその敬

北越巻之五

とも人を不仕假設氏又其人を不仕といて忽小社の中に入
 るしんえ一ゲ二神ありとて飛去る林月只蕭然とて成すく
 のと誅は出一む小児のむじお徳成すたじといふ神四の
 奇今於灵詭の明々なるとわは予是を以按むるに富をそれ
 雜くし又安きる先年予賀源内といつる奇才ありと皆
 人の知る所なれども予賀常ぐ人に對しむるのたと分列
 の知用を用るに只富をいふこととむ安しといふ成すてその在
 らざるといふ人も人各其分量のつら百涉のらるる百涉の
 富をなるといふ不足千錢の力に千錢の富をなるといふ不足予弱
 剣のあら相法を少く學びえと今是を按むるに下涉の奴僕

たゞしく貴相のゝとありと人ぞも是則奴僕中にしくそ貴て
ゆるのゝ又多困を食のゆまされに福相のゝとあり是又矣
中の福をゆるめはてつりある怒るに麒麟の一毛をち
かり是皆そをそめる所はしく百鈔のち多き堂しく千金
の富をとりとてはゆんや平賀氏とがら家を賣りて狗中の
智とつはと不能一日東武に於て富家に才と賣んと
をよむ其給銀九十八や同日二年で限とて諸家皆不肯
依之京師に出ると人ぞも也始終に去る浪華に出即始
のゝ以諸家のやと爰に某の豪富其刻の奇なるは以是
とゆは即給銀九十八や同日をわると時に平賀氏を以て

随意に於行漫與しく又の家産を勤むると二年一日忽來の
て主人は昔く曰君が知遇の恩今正に報びんとと爰に於て
商ののと忽其利三千金以主人に呈しく去とつりされ殊に
平賀氏の一ス奇智なり以因らぬ

其十二

蒲原郡押付村に灵験つらざる稲荷明神あり社地を
即西川堤の下百姓吉右衛門といふ者の墓をせむ所を社殿
の下に住居せむ宛あり常は小狐出くわとび穀は居ると
いと人をも思まざり大さんどおさうは是を不追お祈放
ある人の其社前に流るる小豆の吸油煮の豆腐也例供わ

となつてゐるにあり扱世を扱とくはく社頭を拜するに西頼成
 就と云ふに必其供物を食ひつて不成の程にハハハ食せよ
 と云ふ是を一奇なり列々盗賊の如くに失つたおと祈は
 十にして八九は不出といふは此先祖吉右衛門といふはよ
 百二十年前のよなりぐく其の老のむつ活なるに知れ出て
 衰蓋をかへぬき捨ひたり取つたり耕りけるにぐく来
 るといはく尾と頭と半向き老狐力をひそめく走り來る
 あり吉右衛門驚き刀をさぐりて大なる就き一ツ箭をつくとくに
 飛來るありやと云ふらわりの老狐吉右衛門が捨置る衰蓋の
 下に力とかくせりわらわりの田畑にひらり居れ老若者友

三四人を殺し狐と云く敵御さんと云わぬがく追ひ来るにぞ
 かの驚く狐をぶ刃をひぬ其人の強さのや驚きけん途乃天
 外の花去り扱若者どもわらりくかの老狐を殺さんといふ
 吉右衛門はく是を怖く酒一竹を物としてふに四人を捕じち
 即かの老狐を襲つて己が家の隅りへ食物を置くにわらり
 には老狐吉右衛門が傍をたふれど種々の奇をばはく衆人乃
 目とおはらうと一年吉右衛門の家裏に味増の大屋で煮
 るといはく家内以是を怒らるるに其の家の中へとく入り
 味増大屋で煮く丸めたるおとつるに家の中へとく入り
 吉右衛門驚き此路の吉右衛門の村の寺に煮たる味増

此とていぬきとまれて予とて吉をうたに誓り是必老狐の業
 うんともかの老狐に向ひあり寺へ返さるるとつりけさび又
 其夜のうちにむくをまび返すぬ其余吉を馬の訴訟のとなり
 て出入に勝する諸三四味はく盗賊に合非力の吉を馬の
 自然に術をひく盗賊四五人と打ふせくる活僧老狐の利強
 なると種々奇説ありとて之を東土に伝へり是を各
 其後稲荷大明神と祭なりとて國人のする信又少からず

其十三

新深砂山の間にまき山狐とて人の妖となりてと勝ま
 奇説あり各よあり老狐あり爰に赤沙日とつるまのつ



青山乃老狐
 村長彦次古海を
 のぞむ



村を越次ちらなる者一とを夜のみら新深の公用のゆるこ
 砂山を通うかのま山にかり所を登る比ゆく暑さたが
 少くの本産にやとらひ彼狐の跡とるともあつども草村に小
 使一けるが狐あつくと走り出あど伏キツト刃あつくとまけま
 着次ちら大に井ごうきおの彼名よあふ奴狐なるまきよ藤相
 なるて伏仕出くさるあかると後悔し狐に向くヤけるる狐
 どもく其許の昼昇くあつる伏もあつども味忽に小使く
 驚くやなると定く膝立ちさるけまど伏方におゆあつ
 ろうさるより起しよあまをぶかううとぞく恨のべくまかま
 く我を妹くあつるナド返まぐ事伏死つあといけくゆ

ねぐに彼狐立止りあつ振のりもうける路の傍に石地蔵
 のまゝるわげにわさきやう其地蔵を脊の負ひしもの
 つるまゝるまのぐに忽女の小児を負ひしもの凡呂妻下
 へ妖より着たち大に聲をかけぬく狐のくわひ並
 のねぐに舞入りくと先刻よりおんこひや通り市々あ
 けをわびく我を迷しぬと一言ひわかの女あといふ
 人のねぐに成りさたりやわが村より新保一保づき
 する者ひく只今我室へ来るにわあよりけりきと成
 下打笑ひて小児のはをゆとりく先まゝくは後ひち
 気味はしくさるぐ日ぶまどもゆのつひおなく
 冥府にゆく

北越巻之五

ねぐにわらわとく日の子あかりく樹の下の村より
 かの女立止り着たちらにむうひねおて家松の里に
 是はく心列サデー日おくれまゝ早くかそりぬとひ
 捨内へ入ぬ内は男女のこゑもや娘よ今まゝうけ
 びようそつくとけつじもも孫の成人せうなごはく
 笑ひ語りくさうに親へぐもあさる我室とてや
 かりひくおお不名義なるもかか狐我とこそ妖
 けりまゝるまのぐに家内を迷しぬるとよはれにせ
 けりまゝるまのぐに家内を迷しぬるとよはれにせ
 けりまゝるまのぐに家内を迷しぬるとよはれにせ
 けりまゝるまのぐに家内を迷しぬるとよはれにせ

用あつさぬはく門(出)つてはももねきと傍へつりひねり今
此内(入)ひ女の真の人(は)くはれは今日かましくのとほく喜山
の狐石地蔵を背負く女に女(は)く心(は)油(は)りぬるや
けまらざるを以の外真(を)さばしぬくわ平(き)と成(な)す
あの女(は)拙者(は)娘(は)く去(き)年(ねん)秋(あき)深(ふか)く縁(えん)付(つ)き
ば連(れ)来(き)りくえせよとおとす言(こと)傳(た)へてぬく只(ただ)今(いま)来(き)り
はぞ狐(きつね)はゆるんや着(き)る女(に)又(また)云(い)ふぞ目(め)のあつ彼(かの)狐
が女(に)く成(な)りくぬけ付(つ)き来(き)りくをわあたし娘(むすめ)子の
りけを狐(きつね)の言(こと)にゆふ言(こと)つりけまらざるまは疑(うたが)ひ
可(よ)し思(おも)ふ方(かた)よくひふむどぬのぞと出(い)でるを寤(よ)寐(み)まらぐ

北越巻之五

のうと成(な)り合(あ)い合(あ)い内(うち)のへく俄(たち)火(ひ)をさるん焚(た)きお
つらど彼(かの)女(に)をさるひもぬ定(さだ)ぬら来(き)り猛(まう)火(ひ)の上(うへ)に尾(お)を焙(あぶ)
れい女(に)さくは叫(な)ひ母(は)と祖(お)母(は)と立(た)ち登(のぼ)るは成(な)りぬるぞそ
おきりぬれども男(おとこ)おへ又(また)いサつまど今(いま)の尾(お)をい
えせんぬるぞわどまきりぬあぶるわどぬ終(お)つ小(こ)若(わ)く死(し)
うう然(しか)ども又(また)の尾(お)をさるぬぬぬ其(その)曲(まが)者(もの)ゆるまると門(かど)
窓(まど)ひ居(い)る着(き)る女(に)をさるひするひ小(こ)子(こ)のちりあけ細(こ)合(あ)
村(むら)まのそけ夫(つま)り傾(かた)まぬひ出(い)出(い)諸(もろ)役(やく)人(ひと)立(た)合(あ)吟(ぎん)味(あじ)白(しろ)伏(ふ)ぬ
汝(なん)の上(うへ)とく終(お)つ川(かわ)原(はら)へ引(ひ)出(い)でされ首(くび)をハネト打(うち)落(お)しぬぬ
も着(き)る女(に)首(くび)打(うち)落(お)されまるとおなぐらつとまはくぬぬ

砂束のわのぐさす呀に出さうを尻ちらちひらくおの足ぞぬの
眞土黄泉の旅と云か呀なりぐく仙率く極樂の及にるね
わさうふやと定にまうせくゆわどにみかしの海ゆりく遙に
鏡のあやうけまふねとそ極樂も程迫まくと是より一時もま
ゆふやと海のみやとちるべにたより付されば細き流に橋ありそ
大なる精舎乃堂上に讀經のあやうつく切に感涙袖とちるり
門前の老若男女糸絡群集のさぬ殊勝ふべうどお傍に
池ありく紅白の蓮花さうりに用けさうり後以ちの心中にぞひ
けら我をよぶと蓮のいづきさうらん先争りく又ふやと池の
中へさんぶと花入一莖の蓮に足をかきまふホキト折れてさる

北載卷之五

べうど又一花の足をかきれがホキトおれく池の中へぶくと倒れ
くり糸絡の男女是をぞくそれ気遠ひよ狂人よとゆつる
わどに寺中よりも大勢かけ出ぬく池の中より引あげさて
其方の何者ぞと問ぐさればはくくの私娼婆にありぬへ赤
は日村庄屋屋敷にちつとすのめめてゆとふるしくやけきバ階を
えに笑ひぬの瓶分ちうんとつらまうく海くおづまみれべ特深
の寺町なりけり

其十四

何内谷屋の宮社内榎の太老樹あり一本両俣の糸色さる十
余丈一股のちもてさう年大凡ありく其一股とある内括て空を

以に是を材木の商人の多くを賣んと欲せしむるに
 數十百人を以て之を賣りて其の價を定むるに不能
 爰に予が諸家の某あるもの其折する一股の枝を
 十三金とせしむるに其枝切口徑一丈九尺五寸空の
 九尺杉木挽木總て十余人皆其室宛に住居して
 數日是を引たるに其の折す所六間の大木を數十挺
 中なる所板巾五六尺の間に數百挺其下なる所大
 七十二あり其の未嘗有の大樹とすべし柏崎
 社の木又是より次ぐ四六丈二尺五寸高田滝寺
 大円元年兩基の大樹樹三根あり又これに次ぐ
 長舎門堂あり

北載卷之五

のと大なるもの桂子園貝付挾川桂の右根經六間余河内
 谷天狗杉根の徑二間二尺青籠の觀奇新葦田杉の右根
 ありこれに次ぐ

北載奇流卷之五終